

## 初春

新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事

大伴家持



九月の末より続いた七五三のお参りも、十二月の半ばともなると一段落したようです。今年も大勢の子供さんたちにお参り頂きました。一人の子供さんにご両親兄弟はもとより、お爺ちゃん、お婆ちゃんも一緒にで大変にぎやかです。皆さん境内で写真を撮ったりして、のんびりと楽しそうに過ごしていけます。

丁度この時期は、落ち葉の季節でもあります。皆様に気持ちよくお参りして頂くために、朝からせつせとお掃除に励みます。しかし、早い時間からお参りがあると、途中までしか終わりません。こんな時、「我々の神社だから気持ちよく参拝してほしいよね」といいながら、お手伝いして下さる方たちがいらっしやるのです。本当にありがたいことで、感謝しております。落ち葉一つなく、隅々まで掃き清められ、整然と箒の目がついた境内は本当に清々しいですね。

弥生神社は、建物は古く、設備もありませんが、しっかりとご祈禱等のご奉仕をしております。この年も、氏神様として地域の方々とのふれ合いを大切にしながら励んでいきたいと思えます。

どうか皆様足をお運びください。

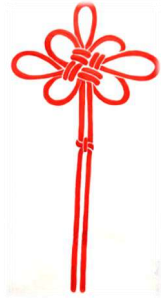
(宮司)

## 年神と歳徳神

年神は、正月に訪れて新しい年をもたらす神です。歳徳神・正月様などともいわれます。年神の「とし」には、五穀、稲の実りの意があり、昔から、新年に降臨して豊かな実りをもたらす神と考えられてきました。このような農耕神の信仰に、その年の吉方（恵方）を司る神という陰陽道の説が加わったものが歳徳神の信仰です。年神、歳徳神ともに正月に来訪する点では同じですが、年神は、正月行事と盆行事が似ているなどから祖先の霊であり、歳徳神の一層古い姿であるともいわれています。

## 年用意と年男

新年を迎える準備が「年用意」です。煤払（大掃除）すすはらい、畳替、障子の張替えなどで家屋を清め、年神の依代よりしろとして門松を立てます。「おがみ松」という大黒柱を立てたり、炉端に松を立てるなどして、年神の依代とするところもあります。また、「年神棚」としめ、「歳徳棚」という臨時の神棚を設けて、注連しめを飾り、鏡、餅、神酒、塩などを供えて神を迎えます。年神の司祭者である年男には家長があたり、神棚に供える若水くみ、神饌のあげおろし、炊事などを務めました。



## 初春 ~ 年神様を迎える ~

昔から人々は、正月には家の内外と心身を清めて年神様をお迎えし、一年の幸福を願いました。

## 年越しと大年火

大晦日から元旦にかけてを「大歳」、「年の夜」といい、年神を迎えるために心身を清め終夜眠らずに過ごすのが年越しの古くからの形でした。この夜の食事は、「御節」おせち「年取り」と呼び、特別な食事をするのが一般的でした。年神に御膳を供え、家族全員がその前で食事し、元旦には、年神の神威を享受するため、家族全員で神饌しんせんをいただきました。

また、神聖な火を新しい年に継ぐ意から、正月三日間あるいは七日間、囲炉裏の火種を絶やさぬようにしている地域もあり、この火を「大年火」、「万年火」などと呼びます。神社では篝火かがりびを焚いて元旦を迎えます。昔は参拝者がその火を分けてもらい、元旦の灯明や料理に点火するところもありました。

このように、正月を迎える準備は年神様を迎える準備であり、人々は、お迎えした神様を心を込めておもてなしをして、一家の一年の幸福を祈りました。日本各地で様々な習俗が今も引き継がれています。

### 【参考文献】

五十嵐謙吉『歳時の文化事典』（八坂書房）平成十八年

國學院大學日本文化研究所編『神道事典』（弘文堂）平成十一年

大塚民俗学会編『民俗学事典』（弘文堂）平成六年



ふだ

# お神札のあるくらし

新しいお神札で

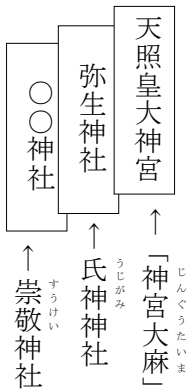
新しい年を迎えましょう

日本の家庭では、昔から新年を迎えるにあたり、氏神様をお祀りする神社から毎年新しくお神札を受け、新しい年の家族の幸福を祈ってきました。

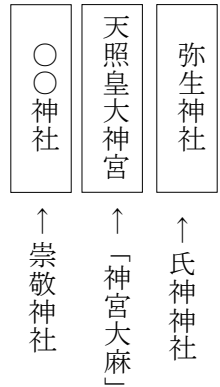
また、古いお神札やお守りは今年一年を無事に過ごせたことに感謝し、神社に納めます。神社では、それらの納められたお神札を清浄な火で焼納します。

## お神札のおまつりの仕方

◆重ねてまつる場合



◆横に並べる場合



**氏神社** 居住する地域の氏神様をお祀りする神社です。この神社の鎮座する周辺の一定地域に居住する方を「氏子」といいます。

**崇敬神社** 地縁や血縁的な関係以外で、個人の特別な信仰等により崇敬される神社のことです。こうした神社を信仰する方を「崇敬者」といいます。

◇両者の違いは以上のようなものであり、一人の方が氏神社と崇敬神社をともに崇敬して御神札をお祀りしても差し支えありません。



お神札のあるくらし  
くらしの中で  
神さまの恵みに感謝の祈りをささげましょう  
神棚がなくても…  
お札立てや家具に白い紙を敷いておまつりしましょう

## 復興焼き海苔

本年も年末年始の札所にて、宮城県奥松島月浜海苔生産グループ「月光プロジェクト」の皆さんが作りました「復興焼き海苔」を、撤下神饌として頒布いたします。また、御祈禱をされた参拝者の方に授与品としてお分けしております。毎年、美味しいと好評をいただいております。現在、「月光プロジェクト」のホームページから、商品を購入することができます。ぜひ月浜の海の味をお試しください。



「月光プロジェクト」ホームページ

<http://www.gekkoh7.jp/>



じんぐうたいま

## 神宮大麻の歴史

神宮大麻は、伊勢の神宮から年ごとに全国に頒布されるお神札です。

### 御師と「御祓い大麻」

いつ頃から全国各地でおまつりされていたのか定かではありませんが、平安時代末には、神宮に仕える御師たちが各地で「御祓」を配布していたことがわかっています。この「御祓い大麻」が「神宮大麻」の始まりとされています。

御師は神宮の崇敬を一般に広めるとともに、「檀那」「檀家」と呼ばれた人々の求めに応じてお祓いと祈禱を行い、祈禱をしたしるしとして「御祓」を配っていました。人々はそれを「御祓さん」と呼び大切におまつりし、遠方から「お伊勢さま」を拝み、信仰を深めていました。

こうした御師の活躍により、江戸時代中期には全国の多くの世帯に大麻が頒布されていきました。また、各地に「伊勢講」と呼ばれる崇敬組織もつくられ、庶民の間で伊勢まいりが盛んになります。御師は、参宮者の宿泊の手配をしたり、自邸で神楽をするなどのもてなしもしていました。



### 「一万度祓」・「五千度祓」

この「御祓い大麻」は、お祓いをした大麻（幣帛）を箱型の箱祓や剣先の形をした剣御祓に納めたものです。また、包み紙にはお祓いを受けた回数と、御師の名前が記されており、「数祓」といって幾度もお祓いをするのと清めの力が増すと言われ、「一万度祓」、「五千度祓」といった御祓大麻が頒布されるようになりました。神宮大麻を祓いのための祓具とする考えがあるのもこうした大麻の歴史によるものです。

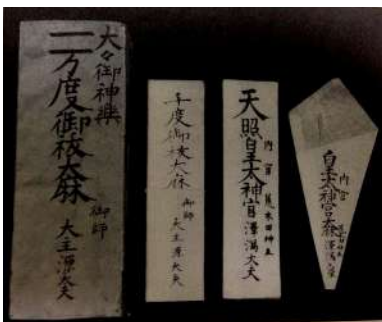
### 「御祓い大麻」から「神宮大麻」へ

やがて、御師により奉製され配られていた「御祓」は、制度改革により神宮が直接、大麻を奉製、頒布するようになりました。これに伴い、大麻の体裁も「天照皇大神宮」の御神号に御璽が押印された現在の形に、名称も「御祓い大麻」から「神宮大麻」へと改称されます。その後、昭和二十一年に神社本庁が設立されると、本庁が神宮大麻頒布の委託を受けて、神社本庁から全国の神社を通じて各御家庭に頒布されるようになったのです。

#### 【参考文献】

國學院大學日本文化研究所編『神道事典』（弘文堂）平成十一年

神社本庁『神宮大麻・歴についてのQ&A』平成十年



御祓



## 神宮参拝のおすすめ

「お伊勢さん」と親しまれる伊勢の神宮はただ「神宮」というのが正式な称号です。

「神宮」は、天照大御神をお祭りする皇大神宮（内宮）と、豊受大御神をお祭りする豊受大神宮（外宮）を御正宮として、一四の別宮と一〇九の摂社、末社、所管社を合わせて一二五社の宮社から成り立っています。

平成二十五年に「第六十二回神宮式年遷宮」が執り行われましたが、両御正宮以外の関係諸社におきましては、今が御遷宮の最中です。

それぞれ、二十年に一度の祭儀に向けて、事前に行われるさまざまな祭典や行事が古来からの定めによって、粛々と進行しています。

「神宮」をはじめとするこの土地には、天空に向かい力強く伸びる千古の杉、凜とした清々しさに満ちた森。幾多の史跡が培ってきたさまざまな史跡。四季折々に美しく移り変わる自然など、見所がいっぱいです。

ゆつたりとめぐるウォーキングで、心のやすらぎを求めて巡拝されてはいかがでしょう。

また是非ご覧頂きたいのが、「神宮徴古館」、日本最古の博物館である「農業館」（これら二館は二十七年十月まで改装のため休館）です。

「神宮美術館」では、伊勢神宮の歴史と文化を学んで頂けたらと思います。そして、伊勢神宮を知るきっかけとなる場所、「せんぐう館」も併せて是非ご覧ください。

伊勢神宮崇敬会で運営している、「神宮会館」があります。旅館のような豪華さはありませんが、一般の方もネット予約で安価に宿泊できます。

朝少し早めに起床すれば、職員が希望者をつれて内宮を詳しく案内してもらいながら参拝することができます。まだ一般の参拝者は誰もいません。その中をジャリジャリと参道の玉石を踏みながら進みます。神聖さを肌身をもって感じられる一瞬です。

季節を問わず、一度お参りしたからといわずに、伊勢の神宮にお参りしましょう。（ご）



【写真】神社本庁ホームページより

## 社務猫あいさつ

今年もよろしく  
お願ひします。  
私、たまにオン  
ラインにもいる  
んですよ。



Facebook



Twitter



ちよろ

あけましておめでと  
うございまほ。



きーこ



## 東北の切り飾り

東北各地でみられる正月の神棚を飾る切り飾り。毎年、在地の鎮守の神社で神職が奉製し、氏子崇敬者に新年用として配られます。これらの切り飾りは、中世までさかのぼるとも言われ、本来は、

神々の依代よかしら、神々への供物、祈願の表示でもありました。その種類は主に、平面に絵や文字が刻み込まれた「切り透かし」、立体的に切り出される「網飾り」があります。この他、棒に切り紙をつけた「御幣ごへい」も正月用に配られます。



気仙沼市 北野神社さん社務所の神棚に飾られた網飾り

写真は、宮城県気仙沼市本吉町小泉に鎮座する八幡神社さんで奉製された切り透かしです。山内義夫宮司様によると、地元では「オカザリ」と呼んでおり、年末には氏子さんに頒布し、神棚の手前に貼って飾るそうです。一枚を作るのに二時間かかるものもあるのですが、十月には準備を始めます。東日本大震災以前、小泉地区には約四百五十世帯あり、三百世帯ほどのお宅に配るため、七種類を五十組、五種類を五十組、三種類を三十組…と膨大な数の切り透かしを作っていたそうです。震災後には神棚に貼ることができないお宅もあるため数は減りましたが、今年は一六〇組を作り、頒布したそうです。

神社によって異なる紙型が伝承されるので、地域によって様々な切り透かしがあります。「小泉の型は、二つ折りではないため、絵は対照でなく、手間がかかる」といいます。三〇センチ×五〇センチを超える紙に細かく刻まれた絵を見ると、気が遠くなるような手作業の大変さを想像します。そうした中に、切り紙を伝承すること、氏子さんたちが正月に神棚を飾ることの意味の重さと、信仰心の深さを感じるのです。

\*山内義宮司様は、全号に掲載しました気仙沼・南三陸参拝旅行において、現地でご説明をしてくださった宮司様です。

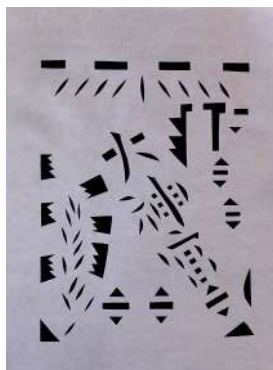
【参考文献】宮城の正月飾り刊行会編『祈りのかたち―宮城の正月飾り―』（日貿出版社）平成十五年

### 【本吉町小泉 八幡神社さんの切り透かし】

写真の6枚の他に「宝船」があります。海岸部の漁業に携わる方に求められるそうです。また、亡くなった方があるお宅は年末、これらの「オカザリ」も御幣も受けないそうです。



「大漁」「豊年」えびす大國



「大神宮」



三方と御神酒



三方と燕



「大年神」 三方と餅



三方と鯛

## 総代さんより

氏子総代二年目を迎えて

大塚慎次郎

平成二十六年十一月で氏子総代の二年生。祭事や行事が一回りしました。前年十一月に宮司より氏子総代を委嘱され、全く神社の知識がないまま務めさせて頂きました。この一年、宮司をはじめ総代の方々の丁寧なご指導と、お会いした氏子の皆様から励ましを受け、何とか奉仕が出来た事を感謝しております。

氏子総代にと声を掛けられ、迷いながらも引き受けさせて頂き仕事の内容も分からずどんな事をやるのだろうか、奉仕が実際に務まるのかと思いを巡らせていました。

そんな中、最初の仕事が「年末年始の準備」でした。これらの仕事は「大麻頒布始め祭」に始まり、地域の方々と共に行う「注連縄奉製」、「初詣奉仕」と続き、当然ながら今まで経験したことのない事ばかり。徐々にはありますが、祭礼や行事を経験するなか「何事も深く地域との繋がりによりに行われている事の大切さが見えてきました。氏子総代になり二年目を迎える今、強く感じる事はまず、「地域の方々と密接な繋がりをもって行われる祭事や行事にあたって、宮司への協力と氏子・崇敬者へのお世話をする事」。次に、神社の繁栄として「弥生神社が、今以上に地域に親しまれ、愛されること」だと思います。

先日、七五三のお参りに合わせ、神社境内の掃除をお手伝いさせて頂いたお参り、親御さんに連れられた子供たちの姿を多く拝見しました。いずれこの子たちが大人になり次の世代を託す我が子連れ、また、弥生神社へお参りするのだろうか、歴史を繋いでゆく姿を思い、なんとも微笑ましく感じました。



12月1日【大麻頒布始め祭】この日から総代さんが地域の皆さんのお宅にお神札をお配りします。



12月7日【注連縄奉製の集い】社殿と鳥居を飾る注連縄が、総代さん、地域の皆さんとの御協力により完成しました。



総代さんが育ててくださった菊

時代を背負う子供が気軽に親しんで神社へ来られる様な、例えば、昔懐かしい遊びで「鎮守の森で紙芝居やけん玉大会」など、そんな人の集まる行事を作るのも一案だと思えます。

知らないことを知る喜びを感じてきたこの一年、二年目も奉仕する喜びに浸りたいと思います。





平成26年 秋

## 七五三詣



次女の七五三で何処でお参りしようか決めかねていた時に義理姉から弥生神社を紹介してもらいました。

初めて参拝した神社でしたが、とてもアットホームな居心地の良い感じがありました。大家族ごとに祝詞をあげて頂き、授与品に手作りの可愛らしい巾着と髪飾りを頂いたのはとても嬉しかったです。真心の込められた素晴らしい授与品でした。居心地が良かったのは、そんな真心が伝わってきたからなのでしょう。

とても心暖まる一日でした。

(澤田佳芳子)

五才の息子の七五三。友人の紹介で七五三詣をさせて頂きました。

弥生神社参拝は七五三当日が初めて。袴姿でりりしくなった息子を連れて御祈禱。神聖な雰囲気以身が引き締まる。一才の次男も静かに座って祝詞をきいていました。御祈禱後にいただいた、手作りの巾着袋と菊結びとトンボ玉のストラップ。心がこもったお祝いにととても温かい優しい気持ちになりました。

弥生神社で感じたのは「凛とした空気はあるんだけど、アットホームで居心地良い場所」という印象。きつと地元の方々に愛されてる神社なんだろうなあ、と思いました。素敵な神社で七五三のお祝いが出来て幸せでした。出会い、繋がりに感謝です。

(小野田尚晃)





# 古今のうた 初春

新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事しよこい

大伴家持

『万葉集』巻第二十 四五一六

「新しい年の始めの、初春の今日降りしきる雪のように、良いことが積み重なりますように。」

『万葉集』の最後に詠まれたうた。天平宝字三年（七五九）、因幡国の国守に就いた大伴家持が、新年に詠んだ寿歌。初句、二句に新年の元日をいい、第三句に立春を述べる。その重なりに歌の荘重さがある。元日の雪は豊年の吉兆と考えられていた。

（七五七年に橘奈良麻呂のクーデター計画の失敗があり、家持は刑罰を受けなかったものの、多くの仲間を失うという厳しい状況の中、この地に就いたといわれます。今年こそ良いことが重なるようにという家持の願いの切実さが伝わってきます。）

【参考】中西進「万葉集 全注原文付（四）」（講談社）昭和五十八年

松や松この頑固なる直立の香のさびしさに年ははじまる

馬場あき子『世紀』（平成十三年）

雪ふかき 睦月の森にこだませり。新年をほぐ 父のかしは手いとし

岡野弘彦『バグダッド燃ゆ』（平成十八年）

この年の幸を祈りし飾り物左義長の巨火となりて消えゆく

二羽 弥『運河』（平成十八年）

しづかなる正月五日あちこちの猫あらはれて鳥居をくぐる

小島ゆかり『ごく自然なる愛』（平成十九年）

おお、降つたる雪かな 氷の床を踏みしめて立つ老狂言師

藤井常世『繭の歳月』（平成四年）

弥生神社

花の歳時記

春から夏

睦月（二月）

さざんか  
山茶花



如月（二月）  
梅



弥生（三月）

じんちょうげ  
沈丁花



卯月（四月）  
桜

あしび  
馬酔木



皐月（五月）

あやめ  
菖蒲



水無月（六月）  
あじさい  
紫陽花



こかげ

## 蚕影神社をたどつて

### 一、蚕影山神社参拝

弥生神社境内に鎮座する蚕影神社。その信仰と歴史をたどります。海老名の養蚕業史を概観した序章に続き、今回は、蚕影神社の総本社である、茨城県つくば市の蚕影山神社を参拝しました。



蚕影山神社は、茨城県つくば市、筑波山を主峰とする筑波山地の不動峠から多気山にかけての山腹北側に鎮座する。この地より、蚕影信仰が関東地方を中心に各地へと広まっていた。

十二月初頭、蚕影山神社を参拝。つくば市神郡の住宅街を抜けると、蚕影神社の鳥居が見えてくる。鳥居脇の池には湧水が、紅葉した落ち葉に埋もれて豊かに水をたたえている。昔参拝した人たちはここで喉を潤したのだろう。かつては全国から日に数百人もの人々が参拝に訪れたというが、境内は閑散としていて、そのぶん社殿までの長い階段は荘厳で神秘的な空気に満ちていた。階段を登り切ったところに見えてくる社殿は、さらに積まれた石垣の上にとっしりと構え、街を見下ろしていた。

蚕影山神社の古名は蚕影山桑林寺。境内にあったという桑林寺は、明治期の神仏分離政策により姿を消している。御由緒板によると、創祀は成務天皇期（一三一〜一九〇年）、筑波国造阿閉色命あへしよのみことによる。稚産霊神わかむすびのかみ、埴山姫命はにやまひめののみこと、木花開耶姫命このはなひらくやひめののみことを祀る。三月二十八日には蚕糸祭がとりおこなわれる。御例祭は十月二十三日である。

現在の結城市周辺のこの辺りは、蚕のムシに適した気候だったので、「結城の蚕種」と呼ばれる良質な蚕種を生産するようになったといわれ、

「タネ屋」と呼ばれる蚕種業者が蚕種の販売とともに、蚕影山神社の信仰を広めたとされる。安政の開国以来、盛んになった養蚕業を背景に、蚕作の安定と豊産を祈願する神社として、蚕影山神社は養蚕信仰の中心となっていた。関東地方のほぼ全域、西は長野県諏訪地方、北は岩手県遠野地方までその信仰は広まったという。

養蚕家の参拝は、とくに春蚕と晩秋の蚕の掃き立て前に集中した。参拝者は玉串料と御神酒、小正月には繭玉を奉納し、神主の御祓いを受けた。また、養蚕農家が「蚕影講」を組織し、毎年、代表の講員が参拝して御祓いを受け、講員の人数分のお札を受けて帰ったといわれる。

かつては神社の入口に茶屋があり、参拝者は縁起物の繭形の菓子と「蚕大当利」という羊羹、参拝記念の手拭いなどを買ったそうだ。参拝後、その名残はないものか通りを見回したが、見当たらず残念に思っていたところ、後日、平日ゆえ閉まっていた麓のお店に羊羹や手拭いがあることを知り、なぜかほっとしたような気持になった。

#### 【参考文献】

阪本栄一『養蠶の神々―蚕神信仰の民俗―』（群馬県文化事業協会）平成二十年







## お正月と狂言

狂言は、田植えや収穫の時期に五穀豊穡への祈りを込めて舞い踊られた猿楽や田楽に由来があり、次第に芸術性を帯びて芸能として完成したものです。室町時代には寺社や幕府の保護を受けて全盛期を迎えました。以来、六百年を経た現在でも、日本の古典芸能として親しまれています。

新年には、祝福、祈願の舞である『三番叟』<sup>さんばそう</sup>がよく演じられますが、今回は年越しの神社で神様が登場する『福の神』と、神道と関係の深い、『禰宜山伏』<sup>ねぎ</sup>を紹介します。

## 「福の神」

室町時代には、現世利益を約束してくれるという福神信仰が流行しました。この狂言から当時の人々の福神のイメージや現世での願い、福神への参拝の様子などが想像できます。

**あらすじ** 二人の男が年越しに福の神の社を参拝し、豆をまき始めると福の神が笑いながら現れます。福の神は御神酒を催促し、酒奉行である松尾の大明神に捧げてから自分も飲み干します。そして二人に、豊かになるには金銀や米ではなく、早起きや慈悲、隣人愛、夫婦愛などの心もちが大切だと説き、福の神に美味しい御神酒をささげるのを忘れぬように伝えて、謡い舞い、朗らかに笑って帰っていきます。

### ◆福神狂言

「福神狂言」に登場する福神は、庶民にささやかな幸せを与える、庶民的で親しみやすい存在です。福神狂言には「神物」として「福の神」「夷毘沙門」<sup>えびさびやもん</sup>、「毘沙門」があります。

【参考文献】金子直樹・吉越研『狂言鑑賞二百一番』（淡交社）平成十七年

神社本庁『神宮大麻・暦についてのQ&A』平成十年

【写真】公益社団法人金沢能楽堂ホームページより

## 「禰宜山伏」

禰宜山伏には、伊勢の禰宜（御師）が登場します。諸国を廻り、人々のために祈祷していた当時の御師の様子を伺うことができます。

**あらすじ** 御幣を手に登場した禰宜は、「まことに神明のお事をあだおろそかに存ぜう事ではござらぬ。天照大神の御神徳によっていず方へ参つても皆御崇敬なさることでござる…」と独り言を言いつつ、茶屋を訪れます。禰宜が休んでいると、羽黒の山伏が入ってきて、散々文句を言い威張り散らします。さらに、禰宜に肩荷の箱まで押し付けて家来のように扱おうとします。見かねた茶屋の主人の機転により、大黒天を双方の祈祷によって折り比べる勝負をします。そこで、禰宜が祝詞をあげると大黒天は禰宜のほうを向きますが、山伏が祈っても横を向いたままです。大黒天の袖を引いて強引に向かせようとする山伏を、大黒天は槌でついて追い込んでいきます。

### ◆山伏狂言

山伏が登場する「山伏狂言」の中に「道中物」があります。修行を終えた羽黒山の山伏が、旅の道中に様々な事件を起こします。山伏は厳しい修験道の修験者ですが、狂言の中では威厳たっぷりでも登場するも失敗ばかりです。道中物には、「蝸牛」<sup>かきゅう</sup>、「柿山伏」「蟹山伏」「腰折」「禰宜山伏」「犬山伏」があります。



## 狂言サイボーグ

野村 萬齋／著  
文藝春秋  
2013.1

型を習得してこそ飛躍する真の個性とは？徹底的に反復練習することによって、身体にプログラミングされる「型」。そんな型の極意を、「胸で見る」「背中中のオーラ」を感じるといった、独自の視点から本人が解説。型破りな役者野村萬齋の演技の秘訣に迫ります。



## 萬齋でござる

朝日文庫  
野村 萬齋／著  
朝日新聞社  
2001.12

若き萬齋本人が、生い立ちから現在、そして未来までを語っています。幼少期の口伝による一対一の稽古にはじまる伝統芸能界の人生儀礼を乗り越えながら成長する様が伝わってきます。「狂言の歴史」「狂言の世界」「おすすめ狂言選」などをおさめ、狂言入門にも最適の書。



## 『陰陽師』のすべて

夢枕獏／著  
文藝春秋  
2012.11

野村萬齋の初主演映画「陰陽師」。本書には主人公安倍晴明を演じての手記が収録されています。原著者である夢枕獏のロングインタビュー、全作品エピソード紹介、登場人物ガイド、傑作選ベスト11など、「陰陽師」の世界を徹底解剖した一冊です。



## 親子論。

坂本廣子／著  
週刊朝日／編、  
佐藤 明／ほか著  
朝日新聞社  
2008.2

子は親の姿をどんな思いで見つめてきたのか？親は子にどう向き合ってきたのか？各界の第一線で活躍する35組の親子が、ありのままの思いを自分の言葉で語った対談集。父であり師匠である野村万作との対談を収録しています。



## 狂言三人三様 野村萬齋の巻

野村 萬齋／編、土屋  
恵一郎／編  
岩波書店  
2003.8

「狂言三人三様」全3巻の第1弾。主要演目についての茂山千作、野村万作との芸談、蜷川幸雄、渡辺守章、いとうせいこう、伊藤キム、夏木マリ、河合祥一郎、網本尚子による萬齋論を掲載しています。舞台芸術の現在を哲学する役者としての野村萬齋が浮き彫りになります。

## 「狂言師 野村萬齋」

今回は、狂言師野村萬齋に関する図書をご紹介します。狂言方泉流の家に生まれ、父との口伝による稽古から始まる伝統芸能社会の堅固な儀礼を乗り越え「型破り」な役者へ成長していくさまは圧巻ですらあります。

小河洋友

(東京都内図書館勤務)

本  
を  
読  
む  
。

## 招福のかわらけ

— 益子の窯元にて —



お正月、札所に並びます「招福のかわらけ」。作っていただいている益子の窯元「JAZZ工房」さんを訪ねました。工房の中には、形の仕上がった作品が棚にずらりと並び、職人さんたちが黙々と土に向き合っていました。「アドリブで思いついたままに創作しています」の言葉通り、緊張した中に穏やかで自由な空気が流れていました。作業を見学しながら、器の作り方など教えていただきました。

まあるく手のひらになじむ三寸ほどの小さな器。そのたたくまいから日本に古来から伝わるかわらけをイメージしました。益子から弥生神社に届けられた器は、御神前で今年一年の健康と招福を御祈願します。そののち、手作りの巾着袋に丁寧にお入れしてお正月の札所に並びます。ぜひお手にとった時の手作りの土のぬくもりを感じてみてください。

「かわらけ」中世によく使われていた土器で、その後も長い間、宴会や、朝廷や神社の祭祀などに使われてきました。作り方や形も様々で、轆轤ろくろや手づくねによるもの、器壁が浅いもの深いもの、底が平たいもの丸いもの、三寸以下の極小のものから五寸を超えるものまであります。本来、釉ゆうのかかっていない素焼きの器をさしますが、現在、多くの神社では白い磁器の「かわらけ」を神饌の器や神事に使っています。

「益子焼」江戸時代末期、笠間（茨城県）で修行した大塚啓三郎が窯を築いたことに始まります。以来、優れた陶土を産出し、大市場東京に近いことから日用道具の産地として発展をとげます。現在、約二六〇もの窯元と、五十の陶器店が立ち並びます。（益子町観光協会ホームページより）



型の上に布を張り、平らに伸ばした粘土をかぶせ、型どりをします。こうしてなかなか器のラインができあがり、内面には布目が残るのです。底部の裏面には、弥生神社参拝の記念にもなりますよう「弥生」の文字を入れていただきました。土が柔らかいうちにゴム印で押していきます。



巾着袋で丁寧に包みます。



先人の祈りの跡をたどって

シリーズ祭祀遺跡

鳥越道臣

## 第四回 青木下遺跡

青木下遺跡は、長野県埴科郡坂城町、大字南条にある古墳時代後期の祭祀遺跡である。

遺跡は、千曲川の右岸、標高約四〇〇メートルの自然堤防に位置し、平成八（一九九六）年、商業施設の建設に伴って発見され、以来二年にわたる発掘調査によって、全国でも類例の少ない土器集積跡であることが明らかとなった。

発掘調査では、約一五〇〇平方メートルの調査区から、約五千個体を超える古墳時代の土器が、弧状・環状に集積された状態で出土し、祭祀遺物とされる石製模造品や手捏土器が相伴したことから、祭祀遺跡と考えられた。

土器集積跡は、二十一基が検出され、なかでも五号土器集積跡は環状にめぐる土器集積の中心に、須恵器の大甕が一つ据えられており、当時の祭祀の状況をよく遺していた。



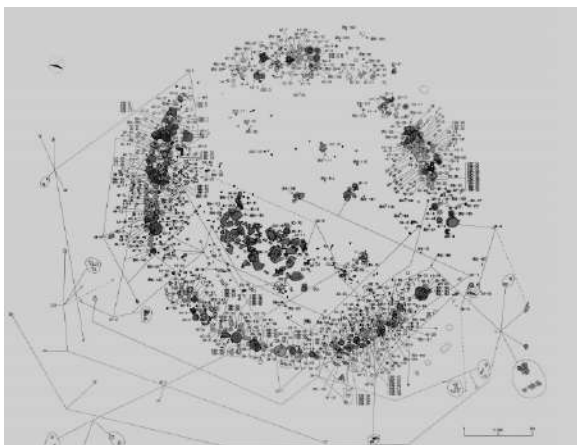
UT5号土器集積跡



UT4号土器集積跡



UT2号土器集積跡



UT5号土器集積跡実測図

これらは、豊作を祈願した農耕祭祀の跡や、西方に流れる千曲川の水害を免れるために祈願した水辺の祭祀の跡など、いくつかの仮説が立てられているが、その実態は不明な点も多く、今もなお研究者によって、解明のための研究が続けられている。

### 【参考文献】

『南条遺跡群 青木下遺跡Ⅱ・Ⅲ』（坂城町埋蔵文化財調査報告書第三十集）坂城町教育委員会、平成十九（二〇〇七）年発行

写真・実測図は、参考文献『南条遺跡群 青木下遺跡Ⅱ・Ⅲ』より転載

## 授与品紹介



萌黄



浅葱



純白

御袋は神職がデザインしました。弥生神社のオリジナルです。  
表面は大きく飛翔する鳥と金糸で「合格」の文字を、裏面には社名と花開く桜の花をあしらいました。地は菱形紋を編み込み、糸には、浅葱、純白、萌黄と、日本の伝統色を使いました。

## 合格守り

受験生の皆様の努力が実りますようご祈願しました。

## 招福の結び守り

弥生神社にてひとつひとつ心を込めて結びました。

御神前で招福の御祈願をしたのち、札所に並びます。縁起の良い「菊結び」と「叶結び」に、トンボ玉をあしらいました。二五センチほどの長さがありますので、壁に下げてくださいと縁起物のお飾りにもなります。若草、浅葱、赤、濃紺と四種類の色がございます。



## 編集後記

第一号発行から一年が経ちました。じつくりと言葉を紡いできたように思います。継続する難しさや発展する面白さを感じています。今号も執筆して頂いた方々ご協力頂いた方々のおかげで形になりました。心から感謝しております。◆昔から人々は、お正月に年神様をお迎えるためあらゆる準備をしました。いつも身近に神様がいて大切に崇めていました。狂言の中の神様、お蚕の神：遺跡にもその姿が映ります。歴史や民俗から人々の信仰の世界を知ることが、同時に私の内にある、素朴な感覚を「思い出す」ことなのだろうと気づかされます。そんな宝物が埋もれ失われゆくものであるとしたら、きちんとみつめて伝えていきたいと思うのです。◆昨秋、「東北の才力ザリ」展を観に行きました。東北地方に伝わる「切り飾り」の繊細さと美しさ、途方もない時間、労力をかけた手作業、そこから生まれる敵かな空気に、神様をお迎えることの重さを感じ、身が引き締まる思いでした。神社で御奉仕するうえで基本ではないかと。◆昨年はぐんぐんと隅々まで心を込めて丁寧に、と心掛けました。日々の御奉仕、授与品、社報ページ、このひびくつひびくつにも、そうして整った地に初めてなんとなくの安心、穏やかさ、なにか心豊かになるものが積み重なっていくように思うのです。少しずつ長い時間をかけて。◆お正月を迎えるにあたり、いつも支えてくださる総代さんたち、弥生神社に親しんでくださる皆様からたくさんのお力を頂きました。感謝の気持ちでいっぱいです。神社は、さまざまな形で関わる人たちの気持ちが集まり通い合う場所でもあるのだとあらためて感じております。丁寧に丁寧に今年も御奉仕して参ります。皆さまどうぞ御参拝ください。

良い年になりますように。(権)



未来をみつめて

編集・発行 弥生神社

海老名市国分北二一三三三三